逃げずに見つめる

尾道市立長江中学校
第３学年　青柳　智紗乃

逝げずに見つめる

長江中学校　三年　青柳智紗乃

もう二度と動かないらしい祖父の姿を見ても、不思議と涙は出てこなかった。初めて直面した「死」は想像よりもふわふわしていて、六ケ月経った今でも、実感できているのか分からない。

どんな人間でも必ず死ぬと知ったのはいつだったろうか。母方の祖父は私が一歳の時には末期がんと診断されていた。それを教えられたのは小学四年生の時だった。当時まだ小さかった二人の妹が無邪気に祖父に抱つこやおんぶをせがむのを見て、無性に腹が立った事を覚えている。また私は、ずっと前から病気のことを知っているはずの周りの大人たちが、何も気にしていない様子で祖父に接する姿が信じられなかった。どうして受け入れられたのかを尋ねたくてたまらない。ぎこちない態度を取ってしまう自分が嫌だった。しかし、大好きな祖父がいなくなると言葉にす

れば、さらにその時が早く来そうで、とても口に出すことはできなかった。

祖父はがんとは思えない程活動的な人である。ゲートボールチームのリーダーを務め、毎日家庭菜園の世話をし、趣味の日用大工では私たち姉妹三人分の勉強机を作った。いつの間にか妹や大人たちに対する私の苛立ちはなくなっていて、私はそれが祖父の病気を受け入れた証拠だと思っていた。

今年の一月、私の学年は修学旅行で鹿児島県へ行った。二、三日目は民泊体験学習があり、とても充実した時間を過ごすことができた。私がお世話になった民泊先の方は毎日大な畑で作業をしておられる。手伝いをするためにじっと見ていると、不意にその姿が昔の祖父と重なった。その瞬間、私は自分が見て見ぬ振りをしていた変化を突きつけられたような気がした。訪れる度に畑の規模が小さくなっていったのはいつからだったか。妹を抱き上げなくなったのはなぜか。大人だけで

の話し合いが増えたように感じたのは本当に気のせいか。今すぐに祖父と会いたいと思った。私は祖父の病気を受け入れたのではない。死を怖がって、自分は大人になったのだと目を逸らして、平気な振りをしていただけだったのだ。

それから二ケ月後に祖父は再入院をし、私たちがお見舞いに行った二週間後に息を引き取った。

祖父の死に顔はとても安らかで、祖母は「家に帰ってきてから元気顔になったんやし。」と笑っていた。最後に見た顔は薬の副作用で膨れ上がっていたから、元の知っている表情に戻っていてほしかった。棺の前で母も父も妹も泣いていた。私は、避け続けた祖父の死を目の前にしても恐怖を感じないことに驚いていた。非しいのに、自然だった。

入院中の祖父を見舞いに行く際、私は小学三年生の妹に病気について話した。四年前の私と同じように衝撃を受ける妹を見る私は、

四年前の母に近い表情をしていたかもしれない。

人は必ず死ぬ。その事実からはどうしたって逃げられない。それを頭だけでなく心で理解するには、たくさんの周りの死を見つめ、受け入れる長い時間が必要なのだと思う。そうして自分の死までの時間をたゞ力にできる人に私はなりたい。周りの大人たちも、きっと何度も死を乗り越えてきたのだと思う。

祖父の葬儀の後、今ではほぼ作物をつくっていない家庭菜園に久しぶりに足を踏み入れた。幼い頃自分の背よりも高い野菜で見えなかった畑全体の広さは、その記憶の何倍も狭かった。畑の大きさが分かるようになった自分にも遮られて見えていない何かが沢山あるのだろう。今の私には逃げずにそれらを見に行く勇気があるはずだ。死ぬまでの間に私の世界がどれだけ広がるか、自分に正直に向き合い続けていきたい。

〈指導者の言葉〉

本校では，「思考力・判断力・表現力を育成する手立ての工夫」を研究主題として，３グループによる授業研究によって授業力の向上を図ってきた。国語科の指導では，「書くこと」の指導の中で，生徒それぞれが書いた文章を，グループで読み合ったり「ひとこと感想」を伝え合ったりする活動にも取り組んできた。

本作品は，大切な祖父との別れの経験から，人の命や「死」について感じた思いを，飾らない彼女自身の言葉で綴っている。幼かった自分が感じたことから始まり，今自分が考えていることを書き進めていく中で，自分自身の心の成長を確かめることができたように感じられる。本作品から，中学生という多感な時期の繊細な感受性が伝わってくる。また，それを表現するために彼女がどのような言葉を選び，どのように表現しているかということに，読み手が魅了される作品として仕上げることができている。